

20161111 みやぎ地域復興ミーティング 事例共有報告②



●登壇者

つながりデザインセンター・あすと長町 代表 飯塚 正広 氏

皆さまこんにちは。あすと長町から参りました飯塚と申します。本日はよろしくお願ひ致します。私の方からは、仮設住宅から復興公営住宅に移る移行期についてのコミュニティ形成を主に話をしたいと思います。

○あすと長町仮設住宅周辺地域概要

あすと長町は仙台市内のまちの真ん中にあります。長町駅のすぐそばにある貨物の操車場だったところが、再開発地域として拓けてきましたので、そこに233戸の仮設住宅が出来ました。仮設住宅の大半が沿岸部に近いところに出来上がっている中、何故かここにポンととんだようにまちの真ん中に突如として現れた仮設住宅です。どういふところからこの仮設住宅に人が入ってきたかという、仙台市内の方が76%、市外の方が残り24%ぐらいです。東日本大震災は、やはり津波の被災者が多いというイメージですが、このあすと長町では仙台市などの丘陵地、市街地からの被災者が

約半数を占めて54%を占めています。仙台駅を中心に半径5kmのドーナツ状に宅地被害が大変多く発生しました。そこから来られた方たちで、コミュニティを持たずに入られてきた方が54%いらっしゃる。また沿岸部の津波被災地から入ってきた人が22%、その他に仙台以南ですね。沿岸部から山元、亘理、岩沼、名取から8%、それから福島第一原子力発電所の事故の影響から自主避難者も4.4%います。あとは県北から石巻、南三陸、気仙沼の方から10%ぐらいの方たちが入ってきています。

私達はコミュニティを持たずに様々な地域から集まってきた仮設住宅であったということです。年齢構成等を見ていただきたいと思ひます。圧倒的に60歳代以上が多くなっており、7割以上を占めております。もちろん60歳以上ですから、無職で単身の方が非常に多い仮設住宅になります。仮設住宅での自治組織の基本理念なんですが、仮設住宅から絶対孤独死を出さない、または安心安全

で楽しく暮らしていける環境をつくるということで、何をやったかということ、仮設住宅でのコミュニティづくりが非常に重要であろうという風に考えました。とにかく役員、班長さんは走りに走り続けました。(スライドを差しながら)これがその勲章ですね、これ私のスリッパです。たった1年間、私がこのスリッパを履いて走った。真ん中に穴が開くくらいですね、走りに走り続けたということです。

○コミュニティづくりにおける視点

コミュニティをつくるには集会所が非常に重要なポイントになってくるかと思います。集会所の利用回数を集計取ったのですが、平均すると50回以上のイベントが集会所で開かれています。という30日で割るとほぼ毎日とにかく集会所に行けば何かやってるというような状況が、この集会所で行われておりました。ですから色々なイベントが開かれていて、とにかく集会所に行くと楽しいという雰囲気をつくってまいりました。

もう一つは、クラブ活動といたしまして、小さなコミュニティを沢山推奨しました。「シネマクラブ」や、「ラジオ体操クラブ」、あと「なんちゃってフランス語クラブ」。とにかく「二人三人集まったら、もうサークルをつくっちゃえ」という形で小さなクラブ活動を一つのコミュニティとして沢山つくりあげる。それをぶどうの房のように一つにまとめ上げるっていうのが、自治会の仕事だという風に思いました。

支援の移り変わりと言うとカッコいいんですけど、実は後付けでして、後からこういうことが良いと分かりました。私たちは、知らず知らずの間にこういうことをやっていたということです。

○支援策の減少とこれから望まれる支援策
これが阪神淡路大震災からずっと支援をしていた

だっている神戸 NPO よろず相談室の牧理事長の資料ですけども、支援は年数ごとに減っていきません。年齢はどんどん上がっていき、ハサミみたいな形になります。20年目ちょうど今の阪神とイコールなのが、今の東日本大震災です。どうかとことかという単身高齢者が非常に危ないという状況が今起きております。支援やボランティアさんとの質と距離の関係なんですが、仮設時代と復興公営住宅時代を比べてみますと、どんどんと支援の数が減っていきます。たぶん、皆さんのところもそのように感じられてると思います。どんどんと支援が減っていきます。最初のうちは全国からきました。それが県内になり、仙台市内になって市内も減っていく。私達としても支援者の数が少なくなっていきます。これは単に活動資金ですね。今日はトヨタ財団の本多さんもらっちゃってますが、助成金がどんどん減っていったるんですね。やはり活動資金が枯渇すると、なかなか活動がしにくくなるということです。

グラフを見ていただくとリアルに分かるんじゃないかなと思います。今のおかれている5年目、どういう状況なのかというのが分かっていたかかと思えます。逆にどういうものが望まれているかということ、専門的なスキル、支援の質の向上を望まれてるんですね。どんどんと支援の質が専門化しつつあります。そういった団体さんが残っていかないと、なかなか支援が出来なくなっているという状況に置かれていると思います。

○移転に伴う入居者の心の波

もう一つ、ハードの復興と心の復興、これ二つに分けて考えていきますと、こんな感じになるんじゃないかなと。半年ぐらいい避難所で、あと仮設住宅5年、これがもっと6年、7年と続くと思えます。復興期に移って、復興住宅に移りますと、どういう形になるのかということ、青い線で私が感

じた心の波を書きました。仮設住宅に入ったときに、「やれやれ」と言って一回落ちます。その後復興住宅に入ったときに「やれやれ」とまた落ちます。仮設住宅に入ったときと復興住宅に入ってきたこの部分。ここの部分が非常に危ないという風に言われています。実は私もつい一週間ほど前まで、この危険というところに陥ってしまいました。

どういった支援が望まれているかという一つの事例ですけども、東松島市に「て・あーて東松島の家」ということで、リタイアされた看護師さん達が専門のスキルを持ち看護師の目線で被災地を支援する拠点を整備しております。こういったものが各地に出来上がらないとなかなか被災者の心の復興というものが進まないという風に考えております。

○「コミュニティ入居」を目指した取り組み

もう一つ、私が仮設の自治会長になった時にアンケート取りました。圧倒的に持ち家の方が多かったです。この方たちが全部自立再建に向けて進むと、私たちがコミュニティ構築を考える会というのをつくらずに済んだのですが、アンケートを取ってびっくりしたのは自力再建が非常に少ないんですね。20%くらいしかないんです。ほとんどの方が復興公営住宅を希望している。やはり仙台市でもなかなか自力再建が難しく、公営住宅を希望する人が多い。ここのところになんとか手を打たないといけないということで、自治組織と別にコミュニティ構築を考える会ということで、みんなで復興公営住宅にコミュニティを維持しながら入ろうというような活動を始めました。私達は意見は沢山言えるのですがまとめ上げることができないので、大学の先生やら専門家の方をワークショップの中でファシリテートしていただきました。そこで私たちは復興公営住宅に入ったということについて勉強を3年前から始めて行ったん

です。

実はハードの計画を立てておりまして、仙台市は公募買い取り方式というのを実施したんですけども、私達も手をあげましたら、残念ながら私たちの公募は落選ということで、コミュニティ維持が不透明ということで、毎日新聞に載った記事です。

○節目となった「卒業式」

そんなことを言っている間に仮設住宅も復興公営住宅も出来上がり、仮設住宅からみんな出ていく中で、一つのけじめとして卒業式をさせていただきました。このような形でけじめをつけさせていただきました。もう一つ、仮設の同窓会ということで半年ほど皆さんとお会いできる機会をつくりました。

○復興公営住宅の自治会づくり

長町には仮設住宅の周りに3棟、320世帯の復興公営住宅が出来上がりました。その中の一つに住まわせていただいております。3棟のうち1棟がペットを飼えるペット棟になっております。残りの二つが160世帯と98世帯入るマンション型の復興公営住宅です。ここで自治会、自治会管理組合をつくっていきます。どういう作り方をしたかということ、ハードが出来上がって住民がどんどん入ってくる。本来ですと入居前の交流会、こういったものをやりたかったですが、なかなか交流会が出来ず、にわかコミュニティみたいなものを作って、世話人会を発足しようということで、住民のコミュニティの調整に入りました、自治会の発足ということで、ここのところを約1年がかりでやってきました。ただ持続可能なコミュニティと自治会作りが出来ると書いてありますが、ここのところはまだ未知数でして、私たちはまったく空白区域にいったわけですから、地元とのしがら

みというものがありません。そこのところがまず大きく違うところかと思います。動ける人間がやっけていくんだということで、私も 55 歳ですけども、うちの役員さんの平均年齢は 50 歳くらいです。若い人たちが中心となって、自治会づくりを行っています。

○孤独死を防ぐ共助・近助の仕組みづくり

そのようにやっている中でも、災害公営住宅では孤独死が発生しています。また孤独死だけではなく、関連死なども発生しております。私は孤独死の定義というのは一人暮らしの高齢者が家族や近親者にみとられずにまた周囲の住民が気付かずに死に至った状況で発見されること、これが孤独死の定義だと思っております。宮城県の今までの数値が 0 だったと知っていますか？議会でこれが問題になり、数値が突然 80 ぐらいに増えたと思えます。復興公営住宅に入っても、あとを絶たないのが救急車です。私にはだんだんと救急車に見えなくなってきました。これに乗っていった人は帰ってきてくれないんです。あすと長町の 3 つの公営住宅ですすでに 10 名の方がお亡くなりになっています。家族に看取られて亡くなった方が大半ですけど、先ほどのグラフで落ち込んだところでお亡くなりになっているという方が非常に多いです。

私たちは共助・近助という仕組みづくりに見守り隊というのを結成しました。鉄の扉をうまく利用して、マグネットを張っています。マグネットを張っていると、来たよという印なんですね。これをおじいちゃんとかおばあちゃんとのコンタクトに使わせていただいております。会えないことを前提にして、鉄の扉をうまく利用して、見守りに来たよということを試行錯誤でやり取りさせていただきます。

また IT を使った見守りも行っております。こ

れは朝起きたらタブレット端末の「起きたよ」というのだけ押しってもらう取り組みも行っております。

仙台市の復興公営住宅の将来ですが、どうしてもマンションタイプの復興公営住宅が多いので、こういったことが起こるかという、私たちの復興公営住宅では入居すれば一市民としての扱いとなります。ですから孤独死や致死の発生リスクが非常に高いです。阪神淡路大震災の教訓が生かされない復興公営住宅になる可能性が非常に高いです。ハード先行で共助がなかなか育たない環境に今私たちはいます。こういう中で私たちが暮らしている。5 年が経過した被災地の現状ですけど、被災地の格差、被災者の格差が広がってきています。たぶん皆さんもお気づきになっていることだと思います。

○より専門性の高い支援へ

それからハード復興の優先。人間の復興、心の復興というのはまだまだ進んでおりません。防潮堤の整備など、不要不急な工事が進んでいて、災害公営住宅の建設などが後回しになっている状況です。こういうところから孤独死や自死といったものが減らないというのが実情です。5 年が経過しより専門性の高い支援、特に看護師さんの支援が必要と感じております。

復興公営住宅の入居後のアンケートを行いました。やはり年齢構成、高齢者が非常に多いです。世帯主も無職の方が非常に多いです。現在の満足度として 6 割くらいの方が満足だというふうに言っていており、第 3 住宅だけ非常に満足度が高い。これはペットとやはり一緒に住めるからなんです。そういう関係で、非常に満足度が高くなっていますが、やはり 6 割程度の方しか満足していないということです。

○今後に向けて

最後にこれから私たちがやるべきこととして、継続的な集会所の利用活動を行っていきたく思っております。コミュニティの再構築と維持継承、高齢者の孤立防止と居場所づくりですね、あとは私達にこれから課題として出てくるのは地域に溶け込む努力。地域コミュニティの起爆剤として、私たちが地域に溶け込んでいく努力をしなければなりません。まずは災害関連死の防止、それと地域包括ケアシステムへの対応やまちづくりへのヒントなどを行っていきたく思っております。これらやるべきことを実現するために、4つくらいの項目があるのですが、その為に発生から5年を経過したところで、私たちはつながりデザインセンター・あすと長町というものを立ち上げて取り組んでおります。

熊本でも地震が起きました。すぐにでも飛んで行きたかったのですが、8月の下旬にようやく熊本の方に行ってまいりました。仮設住宅が出来上がっております。そのところに私たちが苦労した悩みや私たちのノウハウを共有できないかということで行ってまいりました。つながりデザインセンターの設立、これがこれからの仙台の復興にむけて私たちが進むところです。これからようやく私たちの心の復興、人間の復興というものが始まります。皆さんと、一緒に共に走り続けていきたくと思います。ご清聴ありがとうございました。
(終)